

1. 此測定に於て油酸、エライデン酸及リノール酸に遊離ロダンは1モル添加す。
2. リノレニン酸に對する遊離ロダンの添加量は1モルと2モルの間に在り此事實は六臭化ステアリン酸の脱臭素に際しロダン溶液に對する作用を異にする異性體の生成を想像せしむ

## エルシン酸分離の一新方法

木村 和 三 郎

(Seif. Ztg., 1929, 56, 182)

菜種油よりエルシン酸を分離するにトイフェル氏等 (K. Täufel u. C. Bauschinger, Z. ang. Chem., 1928, 41, 157) は鉛鹽アルコール法分別沈澱により固體飽和脂肪酸を除去せる菜種油混合不飽和脂肪酸アルコール溶液を中和稀釋しエルシン酸をマグネシウム鹽として沈澱せしめたり

著者は鉛鹽酒精法により固體飽和脂肪酸を除去せる不飽和脂肪酸アルコール溶液を5% 苛性加里にて部分的に中和しエルシン酸を酸性加里鹽 ( $C_{22}H_{42}O_2 + C_{22}H_{41}O_2K$ ) として分離せり此方法による時はマグネシウム鹽稀薄アルコール法に比し操作は簡單にて多量のアルコールを要せず且此を稀薄する不便を省略し得此方法による時は最初より從來の方法によるよりも純度高きエルシン酸を得

## 砒素の有機化合物に就いて (第一報)

### グリニヤール試薬と三鹽化砒素の反應

松 宮 馨

[Mem. Coll. Sci. Imp. Univ. Kyoto, 1920, IV .217]

グリニヤール試薬に對する金屬及びメタロイドのハロゲン化合物の作用により

Pheiffer (Ber. 37, 319, 1125, 4620, ((1904)) は多くの有機金屬及び有機メタロイド化合物を合成せり、著者は彼の方法によりてフェニル及び  $\alpha$ -ナフチルマグネシウムブロマイドに對する三鹽化砒素の作用を研究し其主成物として、トリ、フェニルアルシン  $(C_6H_5)_3As$  及びトリ、 $\alpha$ , ナフチルアルシン  $(C_{10}H_7)_3As$ , m.p. 248° を得たり。而も後者にありては、ナトリウム法に於て其收量僅かに二〇%なるに比し、七〇%の收量を得たり、第一級及第二級アルシン化合物は副産物として只小量を得たるに過ぎざりき然れども著者はこの反應が  $[AsX_3 + RMgX = RAsX_2 + MgX_2 (1); RAsX_2 + RMgX = R_2AsX + MgX_2 (2); R_2AsX + RMgX = R_3As + MgX_2 (3)]$  の如く三段に起るものと考え反應を過剰の三鹽化砒素の存在に於て行ひ、これに依りて、第一級及び第二級アルシン化合物を得んと試みたり。此目的に對しフェニル及び  $\alpha$ , ナフチルマグネシウムブロマイドを三鹽化砒素のエーテル溶液上に徐々に滴下せしめ、其結果、豫期せる第一級化合物は得ざりしも、主生物として、デ、フェニル、クロロアルシン  $(C_6H_5)_2AsCl$  及びデ  $\alpha$ , ナフチルクロロアルシン、 $(C_{10}H_7)_2AsCl$  を得たり、後者は m.p. 166—167° の微黄色の結晶にして收量は、理論數の六〇%なりき。

## アンチモンの有機化合物に就いて (第一報)

$\alpha$ , ナフチル、マグネシウムブロマイドとアンチモンの無機化合物との反應、トリ、 $\alpha$ , ナフチルスチビン及び其誘導體。

松 宮 馨

[Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, 1925, VIII. 11.]

$\alpha$ , ナフチル、マグネシウムブロマイドと種々の無機アンチモン化合物との反應に於て、三鹽化アンチモンは  $\alpha$ , ナフチル、マグネシウムブロマイドと易く反應して、トリ、 $\alpha$ , ナフチル、スチビン  $(C_{10}H_7)_3Sb$  m.p. 216—217° を生ず、三鹽化アンチモン及びアンチモンオキシクロライドは全く反應せず、無晶形の三硫化アンチモンは之に